泥棒とイーダ

第02回　おざなり少女と刺青の男

牧田真有子

雨音に金属の響きがまざる。鉄のはしごを傾げたような簡潔な造りの階段を佐原さんは降りてきた。細いというよりぎゅっと固めたような痩せ方で、芯に重みがある。薄茶色いズボンの裾をたくし込んだ黒の長靴が、私の頭の高さへ至り、太ももの位置に達し、私のびしょびしょの靴と同じ地平にまで降り立った。

一体何の用があって来たのか問うまなざしを彼が振り向けているとわかっていた。だが私は彼の顔を見られなかった。相手から逸らした目に、青黒く濡れた路地を一足飛びにして、その向うの商店街の灯りがはりついてくる。佐原さんはまだ中身の入っていないへなへなのエコバッグをぶら提げ、長靴を鳴らしてそちらへ歩いていく。壊れた扇風機や自転車が投げ込まれていれば濁流の川にでも突進するくせに、そういえば普段の彼は潔癖症なのだった。きっとズボンへの泥ハネにも目くじらを立てるのだろう。

悪寒がしてこめかみを押さえた。指先に泥がついている。さっきまでバトンみたいに摑んでいた男児の靴から移ったのだ。

帰路につく途中、私はスーパーマーケットのトイレで泣いた。泣けて泣けてどうしようもなくなった。芳香剤の匂いが鋭くたちこめる個室で、突っ立ったまま声を殺してしゃくりあげた。痙攣的な息遣いをもう自分の意志ではとめられず、時おり体の向きだけくるくると変えた。

家では父が外国製のパズルを解きながら日曜日の残り時間を典雅に摩滅させていた。根がお洒落にできているのだから仕方がない。

「彼、誕生会のこと何か言ってたか」

父はゆったりと尋ねた。そうそう死にたいときは死んでくれだってさ、

とはさすがに答えられなかった。
「頭痛い。体の節々がじめじめ寒い」
不本意な薄笑いを浮かべて私は言った。母もパート先の大型手芸用品店から帰っていたらしい。居間にやってきて、しめじを買ってきてくれたかと朗らかに言う。私が怪訝な顔をすると、平板なため息をついて台所に戻った。しめじの依頼が吹き込まれた携帯の留守電を後から聞いた。
親から叱られたことはほとんどない。私が知っているのは幕をおろすような息、何もなかったことにする息だ。それを聞くと、自分の口から息がわずかに抜きとられる感じがする。
その夜、脇に挟んだ電子体温計はめざましい数値をはじき出した。

木曜にようやく登校できた。たった六日ぶりにしては通学路がよそよそしく、なんだか自分のいないこの世を自転車で走っているみたいだった。しかし同級生たちは相変わらず無節操なほど愛想良く迎えてくれた。
「熱かなり高かったの？　唇、荒れてるね。私チューブ型のリップ持ってるよ？」
まず、シロと呼ばれる城谷めぐみが、私だけでなく周囲数人に行き渡るようパッと声を撒いた。だぶだぶのセーターの裾からはみだす短い短いスカート。以前、佐原さんにもらった一万円札を眺めて恍惚としている私に「何か奢って」とぬかりなくコメントしてきた彼女だ。
「いいじゃん病み上がり。俺って半病人がタイプなんだよ」
すかさず沼木康男がほらを吹く。あのとき、自分は床の間に万札を飾っていると言った彼は、皆から呼び名を「沼男」と短縮されても平然として見事に機嫌がいい。
「痩せたよねえ」
「沼男のためにおでこに冷却シート貼って登校してやれば？」
「で口に斜めに体温計くわえてんのな」
別の人たちが口々に言い、「それすごいストライクだわ」と沼男はただでさえ細い目をいよいよ縮めて破顔した。私は「ありがとう」と席を

たった。その場にふさわしい対応をせわしく考えていたのだが、ふっと、考えるのをやめた。後ろの席の史乃と目が合った。やりとりには加わらずとも微笑を浮かべていたらしい彼女は、笑んだまま私に目を凝らした。私は教室を出た。場の温度をつなぎとめるシロと沼男の軽快な声が、廊下まで聞こえていた。

授業の開始間際に着席し、机上のプリント類が曜日ごとにクリップで分けられていると今さら気づいた。

「これって」

薄い紙束を手に私が後ろの席を振り向くと、史乃は「うん。まだ調子悪そうだね。お大事に」とほっそりした声で言った。めずらしく髪を結わえている彼女の首は、もう触っているような気になるほどすべすべと白い。私は首に向って礼を言った。人の目を見るのが億劫だ。授業を受けるのも億劫だが、受けないでいるのも全く同じくらい億劫だ。教師から指名されると適当に答えた。いかに見当はずれな解答であったかを知っても、以前みたいにうろたえたり、赤面することがない。

今までの私よりも少ない私になっている。そう思う。思い切り蛇口は捻ったのにちょろちょろとしか水の流れないような感覚が、風邪が治ってからも体の内側にはりついている。

週が明け、今までは手放せるなんて知らなかった色んなものを私は次々手放していった。最低限の挨拶と返事しかしなかった。予習も宿題もせず教科書を忘れても取り繕わなかった。周囲の人たちもさすがに不審に思い始めたらしい。だが排除されることも追及されることもなかった。私がいかにおざなりな対応しかしなくても、シロたちはあくまでいつもの調子で輪に入れようとした。

佐原さんに命を救われたのだ、そう認識するときの、腹の底が華やかになるような安堵。「この命のいくらかには佐原さんの命が染みとおっている」「この命はどこかでこの命以外とつながっている」と思ってきた。しかし長靴を履いた当人から真顔で切り離された以上、何が染みこんでいようが私は私以上でも私以下でもないのだ。

皆が皆、間一髪で救出された過去を持つわけでもないはずなのに、誰も取り乱すことなくすごしているのはなぜなんだろう？　ほんとうの自分と約束しているのだろうか。ほどこうとしてもその前に消えてしまう、結び目のようなもの。今この瞬間の私だけでは破棄することの不可能な約束。シロや沼男に尋ねることはできなかった。そんなものはないのだと陽気に即答されるのが怖かった。

「どうしたの？」

何度もそう訊いてくるのは、史乃だけだ。「どうしてそんなふうにしてるの？」「誰かと何かあったの？」と彼女はことあるごとにそっと詮索した。控えめだが集中した表情で、息がかかりそうな近さで。そのたび私は「どうしたもこうしたも」とのらりくらりかわした。座席が一番後ろの彼女は、課題などの提出時にこの一列の回収係をするから、頻繁にパスする私がいやでも目につくのだろう。そう捉えてはいたが釈然としなかった。

水曜の放課後も彼女はささいなことがきっかけで尋ねてきた。

「どうしたの？」

「ていうかどうしたの？」

めずらしく即座に私が返すと、史乃もすぐシャーペンをカタンと机に置いた。ふと、殴られるのかと思った。同時に戸口から声を掛けられた。

「亜季」

見当がついていないまま振り向くと、スクールバッグを肩に掛けたチカだった。こんな甲高い声の人だっただろうか。

「風邪ひいてたんだってね。今日はあずまや、大丈夫？」

そういえば明日は古文の単語テストがある。毎週、川原で彼女と単語の暗記をするのが楽しかったことはもちろん覚えている。でも、この人への親しみも手放してしまいたいという思いに駆られた。

「大丈夫ではない」私は言った。

「なんで」

「ああいうことをする根拠を見失ってしまい」

チカは笑って言った。
「行こ。先週は亜季と勉強しなかったからやばすぎる点数とっちゃって」
「何点」
「バイト先で怒られてる真っ最中でも、思い出し笑いできるような点」
立ち話している間、廊下を行き来する男女が何人かチカに手を振った。私はチカと並んで教室を出た。史乃はもうなごやかにシロと喋っていた。
曇っているのに透明感のある午後だった。中州の木々を暗緑色に映す凪いだ川面に、釣り人たちが糸を垂れていた。
暗記作業はチカ一人ががんばった。私は丈の長い草をむしって編んでいた。
「古文単語を覚える根拠をなくしたって、何。もう未来しかみないってこと？」
風が鳴り、チカが顔を上げて言った。
「古文限定じゃないって。日常全般を続ける根拠だよ」
「ちょっと待って、そんなすごいもん持ってたの？」
自分に恩人がいること、その人の手で恩自体をもみ消されたことについて、私は手短に説明した。チカは利口な少年のような顔で耳を傾けていた。
「それで？　いつか金持ちになってめくるめく恩返しをする、という目的が日常の原動力だったってこと？」
「じゃなくて。どんなに無意味に思えても生きるしかない、責任があったの。この命は私だけのものではない、っていうか」
「妊婦の思想じゃん」
私は草の冠もどきを彼女に投げつけた。ブレザーの紺色につつまれた、いかにも弾力のある彼女の胸の上で長い草がほどけた。チカはそちらをまるで見ずに、私に向かって艶然と笑いかけていた。
「チカってさ。自分自身とかわした約束みたいなものがあるの？」
「さあ。あるのかもしれないけど、約束の内容は知らない気がする」

「それ、ないのと同じだよね？　埋めようとは思わないの？」
つよい風に流される髪をチカはぎゅっと耳にかけた。彼女が指をはずした単語帳のページは、羽ばたいて飛んでいきそうな勢いでめくれた。
「ないことに慣れようとは思わないの？」
余分な力の入っていないすっきりした顔つきでチカは言った。なだめるでも押しつけるでもなく、問うつもりすらないような中立的な声だったが、私はなんとなく謝った。西の空にやわらかな青が留まっている以外、辺りはもう暗かった。自転車で通った土手の片側は、川原の斜面いっぱいの揺れるススキにどこまでも縁取られていた。
「そうだ、予定あけといてもらったのに悪いけど、誕生会しないから」
私は言った。
「了解了解」
チカはハンドルから離した手のひらにススキの穂を次から次へと命中させた。
きりりと品のいいアイスクリーム屋に寄るのは久しぶりだった。学生バイトらしい男が、「冷えるよ、そこ。中あいてますよ」と商品を外で受け取る二人へ呆れたように言い、「今日は気を引き締めに来たんで」とチカが笑って受け流した。いつのまにかその声は聞き慣れたものになっていた。軒灯に照らされた壁に淡い影が落ちている。私が今までしてきたことは、白い壁に伸びる影を白ペンキで塗りつぶそうとするようなものだったのかと思う。

居間では決闘みたいな意気込みの夫婦喧嘩が繰り広げられていた。怒鳴るときには唾が散り、双眸は爛々と燃えていた。彼らは、二人でいるときはかなりナチュラルなのだ。両親が私に気づいていない間に、ドアを閉じて再び家を出た。アイスを食べたばかりなのにひどく飢えていた。重い鞄はガレージの自転車の籠に入れたまま、財布と携帯だけ持って歩いた。どういうわけかコンビニの前でも中学生たちが入り乱れてもめていた。今日は皆ずいぶん血が騒ぐらしい。私は胃に手を当ててまた歩き

出した。異物めいて感じるほどの空腹だった。

ＡＴＭコーナーだけがまだ営業している銀行の脇に、紺尽くしの服を着た背の高い男が立っていた。夜と同化するナイロンジャンパーの袖から伸びる手首が灯りのように白い。人が通りかかると街灯の下に踏み出し、手にした紙束から一枚抜いて差し出しては無視され、くるりと踵を返す。おぼろげな踊りに似たこの動きは以前にも見たことがあった。私の前を、網タイツと濃い緑のハイヒールで闊歩している女性も、彼の存在を少し意識したのがわかった。男が一歩進み出た。

「自分を支えているものはありますか？」

磨きたてのような声だった。女は今自分が受け取っているビラの中身よりも持ち主の顔を遠慮なく眺めた。横を向いた彼女のマスカラは、何も乗せていないのがふしぎなほど屈強に塗り固められていた。私も男の方を掠め見た。彼がやや目尻の下がった切れ長の眼をこちらに向けた。幅の広い口もとにも面長の頬にも、人なつこい明かりが宿っている。反射的にすがりつきたくなるほど優しい顔が、そこにはあった。彼はつづけさまに私にも渡そうとすばやく動いたが、私はそれよりすばしこく前をすりぬけた。網タイツの足が煙草屋の角を曲がる。私はほとんど無意識であとに続いた。彼女はビラに目を走らせ、次の角で曲がったとたん、片手でくしゃっとさせて夜道に投げ捨てた。周りを窺うのもそこそこに私はそれを拾い上げた。

『〈イーダ会〉にようこそ！　自分の精神を支えるものが自分の精神だけだということ、またそのシステムを作っているのも自分自身だということに、疲れていませんか。そんな時代を生きる私たちに必要なのは、〈自分という存在はもっと大きな存在の一部分にすぎない〉という認識です。私たち同好会は一つの試みとして、各人が腕に一枚の、小さな鱗の刺青を入れています。自分自身から自由になるために。想像して下さい。光る鱗にびっしりと覆われた、長大な獣イーダが悠然と渡っていく空を。』

それっきりだった。結局何の同好会なのか、皆で膝つき合わせて「認

識」するだけのサークルなんてあるのか、そんな静まり返った活動の人たちがなぜ彫り物なのか。詳しくはホームページをご覧ください、とURLが小さく添えられている。

ビラを私のものにする行為にかすかな嫌悪感はあったが、捨てられずポケットに仕舞った。濃密な空腹感はどこかへ紛れていた。

あまりにも授業についていけないせいか、ここにいるのに臨場感はゼロだ。青空と乾いた強風から教室を隔てるガラス窓。いつもの座席、三十数人分の生温かな沈黙。教壇で体をこちらに向けて語りかけながら、片手で背後の黒板を消す教師。指名されて英語の会話文を徹底的に棒読みする生徒。

奥行きのある絵を眺めているみたいだ。私のポジションがどこなのかわからなかった。周りを絵に象(かたど)られながらも、私のいるところは絵の外側であり、すさまじくがらんとしている。「どこか」であることの条件を満たしていない。でもこのポジションの外側には、もっと何もないのだということを、時折しんしんと肌で感じる。外側とさえ言えない。そこは絶えず消えている。私の死なのかという気がする。

じっと絵の細部を鑑賞する。小さく畳んだ手紙を回覧する人、半目で眠る人、カッと目を見ひらいてメールを打つ人、教科書に挟んだ漫画に夢中な人、化粧のできばえを手鏡で点検する人、次の授業の宿題に追われる人。死にたい人、もいるんだろうか。英語教師のセーターには毒キノコのような色柄の茸類(たけるい)が所狭しと編みこまれている。誰かが「その服ほとんど犯罪じゃないすか」と野次(やじ)る。別の誰かが「あのセーター自体がもう幻覚だろ」と笑っている。沼男は和訳の宿題を忘れたお詫(わ)びに「瞬間的に男前になる」という渾身(こんしん)の一発芸を披露して先生に怒られている。指で目の上の皮膚を都合して顔の中心に気合いを入れ、二重瞼(まぶた)と細く通った鼻筋を一瞬獲得するらしい。潔くもとに戻った彼の容貌を見てつきあいのいい女の子たちがげらげらとはやし立てる。起伏の少ない顔面に、細く克明な輪郭の目。沼男は何を考えているのかわからない、

見る者の腑に落ちない面立ちだ。
前に出て答えを黒板に書くよう先生は矢継ぎ早に指名した。
「じゃあ五番の英訳を、勝見亜季」
執念深く編みこまれたキノコを数えていた私は、先生の方からも私の姿が見えていたことに意表を突かれながらふらふらと立ち上がった。五、六人がチョークを走らせる音が響いた。生徒と入れ違いに教壇へ上がった先生は赤いチョーク片手に構文の解説を始めた。私以外は皆正解した。そして私の書き文字はずばぬけて大きかった。他の人たちの繊細でそつのない英文と並ぶと、そこだけオペラグラスで見ているようなサイズ感だ。これに関しては今に始まったことではない。先生は黒板消しを当てる寸前、手をとめて言った。
「勝見は、美しくはないがものすごく丁寧な字、を書くね」
私はチョークの粉が白く入り込んだ指紋を見下ろした。耳が熱かった。黒板に書いた字についてコメントされることには小学生の頃から慣れていたが、動揺した。褒めてるようで褒めてないし、とシロが笑っていた。
ホームルームの後、階段を降りていると現国のおじさん教師が「返事くらいしなさい！」と叱り飛ばした。私は自分が素通りしたことを知った。そういえば彼の野太い「さよなら」ははっきりと聞こえていた。私は謝り、立ち去ろうとした。
「ちょっと勝見。きみ最近変だけど、どうかしたか。こないだの課題もまだ提出してないよな？　いじめられてるとかじゃないね？」
「ちがいます」
背が低くがっちりした体格の彼は少し辺りを見遣ってから言った。
「お家で何かあったわけでもないよな？」
私はうなずいた。肩にかけたバッグが持ち重りしてきた。
「君んとこの柿森先生はほら、ちょっとあれだから」
「上の空ですか」私は自分のことを棚に上げた。
「おっとりしたたちだから」現国は眉をひそめて訂正した。「クラスで何か困ったことがあったら自分からちゃんと言いなさいよ？　私にでも

いいし」

私は階段の手すりを握った。向き合っていても、さっきと同様に彼の存在を度外視してしまいそうになったのだ。それでも彼が叱責した声はまだ耳に立ちこめていた。

今度の授業の際には先週分の課題も提出するように言って現国はのしのし階段を上っていった。うなずいたけれど、きっと提出はしない。「しない」というより、「できない」のかもしれない。家ではたいてい自分の部屋の壁にもたれて座り込んでいる。どうしようもなく体が暗い。画期的な憂鬱だった。こんなすごし方は従来なら我慢ならなかったと思う。私は屋外で一人ぶらぶらするのが好きだった。休日ともなれば音楽を聴きながら線路沿いを歩けるところまで歩いたり、知らない公園を探して、水筒に入れてきた紅茶を飲みながら漫画を読んだり、活気のない小さな街なのに飽きなかった。でも今は、いくらでも壁にもたれて放心していられた。習慣的な手伝いはするが、洗濯物は二度に分けて干した。庭を掃くときも、ややもすれば箒（ほうき）の柄にもたれかかろうとした。

課題を提出しなければ現国はまた私の相談にのろうとし、私はまたうそをつき、彼は私を信じられなくなっていくだろう。しかしいつか死ぬ彼といつか死ぬ私との間で、何かが失われようと失われまいと、何の差があるのだろう？

髪をすすぎながら、歯を磨きながら、体がすうっと傾きそうになる。もし私が自殺を実行したら近しい人はたぶん唖然（あぜん）とする。けれど実行する場合としない場合が、私自身にとってどう違うのかさっぱりわからなかった。手櫛（てぐし）で梳（す）くだけの髪は常にもつれた。

文化祭でクラスをあげて環境問題に関するパネル展示をすることがいつのまにか決まっていた。今日のホームルームはその内容を具体的に詰めていく段階にあるらしかった。何人かの女の子たちが、「絶対客来ないでしょ。閑古鳥（かんことり）閑古鳥」「ありきたりだよねえ」とくすぶっていた。壇上の実行委員はてこずり、窓際で椅子に腰掛けた担任は入念にふくら

はぎを揉んでいた。時々史乃が、「じゃあエコクッキングの実演っていうかたちで模擬店を併設するのはどう？」とか、「通説となってるタイプのエコ活動をそのまま紹介するんじゃなくて、それが本当にエコになってるのかって疑う形式に絞るのも面白いんじゃないかな」とか、嫌味にならない程度にはきはきとフォローした。閑古鳥のけだるい鳴き声を想像している私の頭の真後ろで、涼しい頭脳がくるくる回転していた。

結局班分けと、それぞれが担当するテーマの決定までこぎつけて解散となった。当番の私は日誌を締めくくるため残っていた。黒板に走り書きされた分担表を清書して掲示板に貼り出すらしく、実行委員の北岡君が模造紙とカラフルなペンを手に教室へ戻ってくる。

「長村さんさっきはありがとうな、色々意見出してくれて助かった。ついでにこれも書いてくれない？　俺、字ほんとに下手だから」

彼は、沼男の席で喋っていた史乃に声をかけた。史乃は顔の前で手を振った。

「だめだめ、私の字って小さいしきたないの」

北岡君が意外そうに高い声を出す。

「ペンより毛筆が似合うっていうか、答案用紙も草書体でしたためそうなのにな」

「俺も、史乃はレポート、巻物で提出してると思ってた」

絵巻を広げては巻き戻す仕草をしながら沼男がまた調子のよいことを言っている。腰から流れ落ちそうなズボンの穿き方も相変わらずだし、あの緑のセーターは学校指定のものではない。でも沼男の髪は温かみのある黒だ。短いのにふさふさと嵩がある。朝、手袋を忘れてきた人なら誰でも、かじかんだ指をつっこみたくなるはずだ。彼の背後の窓からは白い空が見え、たなびく模様のように鳥の群れが彼方を飛んでいた。

沼男は架空の巻物をまっすぐこちらへ差し向け、「あっ。美しくはないがはっきりした字、にかけてはクラス随一の人があそこに」と私を抜擢した。「見てはいたが聞こえなかった」ふりをしようとしたが、今度は名指しされた。

「亜季、書いてやってよ。代わりに」
沼男がそう言ったとき、史乃は彼よりもむしろ私を睨(にら)んだ。調整を一切していない目つきだった。私はそれに全く対処できなかった。「彼女は当然ふざけて睨んでいるのだ」と思おうとしたが、見えたままを信じるなら、彼女は私を否(いな)んでいた。
「亜季、書いてやってよ。代わりに」
人の気も知らず、沼男は今度は二重瞼で鼻筋の通った顔になって言った。私は書くことにした。
「書くの遅いから帰ってくれていいよ。マジックとか柿森先生に返しとくし」私は言った。
「そんな、いいって。せめてそれはこっちでやるから」史乃はもういつもの清楚(せいそ)なまなざしで言った。「じゃあ俺はせめて掲示板に貼るから」と北岡君が笑い、「せめて修正液ぬるから」と沼男が引き取った。私は模造紙に清書しはじめた。一斑「データで見る環境破壊」橋崎。三井。山路。本島。史乃と北岡君は昨日見たテレビ番組の話で盛り上がっていた。近くの机へ腰掛けた沼男は演奏するように修正ペンをかたかた振った。
私はゆっくりと息をしながら、黒板に列挙された文字を一人分ずつ正確に写し取った。六班「今から始めるエコライフ」沼木、のハライを書き終えたら、沼男が身を乗り出して「くわ」と変な声を出した。
『『沼男』って書き間違える方に心の中で賭けてたのによう」
出番のなかった修正液係はガムを一枚寄越した。私は彼とガムを交互に眺めた。
「何、もしかして俺の名前書いてる自覚なかったとか？」
「形としてしか、見てなかった」
「あんまり大事そうに書くからさ。素敵な沼男君、という憧れをこめてるとしか思えず」
「私、そうは見えなかったなあ」史乃が口を挟んだ。「誰のものでもない匿名的な字って感じだもん。読みやすいからそう思うのかもだけど」

最後は私の方に親しげな笑顔を見せて言った。私はうつむいてガムを口に含んだ。四人で教室を出た。座っているといちばん大きく見える沼男は、実際に並ぶと北岡君や史乃の背丈よりも、一六〇センチの私に近い。

学校を出てすぐの柳の角で沼男たちとは帰り道が分かれるが、史乃のそれとは半分以上重なっている。今日まで帰りが一緒にならなかったのがふしぎなくらいだ。私たちの自転車は長い橋から川の土手へと併走した。史乃は俳優の好みや旅行したい外国などについて当たり障りなく喋りつづけた。私は味の抜けたガムを噛(か)みつづけた。竹林を抜け、次の三叉路で別れるという間際、中三のときの同級生とばったり会った。普段着の彼女は疑り深そうな顔の小型犬を散歩させていた。

いつものように軽い目礼で済ませるつもりだった。狭い街だからかつての知り合いたちと出くわさないわけにもいかない。

しかし彼女は、犬がつんのめるほど急に立ちどまった。それから私にぎこちなく笑いかけて言った。

「髪、伸びたんだね」

とっさに私は「そう、けっこう長いでしょう」と応じたが、声が浅かった。史乃もぎょっとしているのがわかった。きっと単独同士で会っていたら無言ですれちがったのだろう。こちらが二人組みだったから彼女も調子が狂い、犬の意図せざる行動に出たのだろう。

「二人って、仲いいんだね。ごめん、そりゃそうだよね」

犬が小さな体で強情に歩き出し、彼女は引っ張られるままになって固い笑顔で「じゃあ」と言った。三叉路で史乃は、旧家(きゅうか)の多い高台へつづく、竹林沿いの道へ折れる。湿った風に波打つ竹の葉がざあざあ鳴っていた。史乃はくるりときれいにこちらを向いて、整頓された笑顔で手を振った。

今さら申し訳ないけれど誕生会はもういい、と言うとき思いのほか声が震えそうになった。両親は一瞬うつろな目で私を見た。それから「も

う高校生だもんな」「友達だけでやりたいよね」とまことしやかな微笑を浮かべた。

翌日の放課後、佐原さんのアパートに立ち寄った。結局今年は招待状を渡さなかったものの、誕生日からいちばん近い日曜に開催するのが恒例だからその心積もりでいるかもしれない。彼と接するのは気が重くて、ずるずると確認を後まわしにしていたのだ。

前回より短く「死んでくれ」だけ言われたらどうしよう、と暗黒の想像をめぐらせしばらく鉄骨階段を上がる決心がつかなかった。ずっとテレビの大きな音がしていた。開け放しのドアからこの世のものとは思えない柄のワンピースのおばさんがくわえ煙草で出てきて、巨大なアロエの鉢へティーカップから水を遣り、また入っていく。何かが飽和してしまったような古めかしいアパートは、それだけでも少し緊張してしまう。自前の紙を差し替えるネームプレートは空いているところが多い。ようやく二階の廊下に足を踏み入れ、あたりをつけていたドアの前に立つ。私を見下ろしたのは、折込みチラシの裏に女の字で「佐原」と走り書きされた表札だった。

気づいたら私はインターホンを押していた。

上下揃ってスウェットの佐原さんは腕組みをして戸口にもたれ、まともに悪態づいた。

「そういうことは早く言え、くそ、無駄金使わせやがって」

「ごめんなさい」

紺のスウェットは洗いこまれすぎて色が曇っていた。肘から下にかけて毛玉がぼうぼうと湧いている。水廻りを除くと一間らしく、部屋は褪せた畳敷きだった。

「で、今度はいくつになる気だよ」

「十六」

佐原さんは十六歳というのが何歳なのかわかりかねるような顔をした。私のなかで彼の意味が激変したことと全く無関係に、彼は依然として露骨に不機嫌に生きていた。対面するとかえって私は気楽になった。部屋

の中で携帯の着信音が鳴り、佐原さんは座って待つよう促して電話に出た。いつもお世話になっております。そうですか。明日午前着でお送りいただけるのならこちらは締め切りが一日早くなっても結構です。はい。はい。こちらこそよろしくお願いいたします。佐原さんはちゃんと社会人のふりをしていた。私は卓袱台（ちゃぶだい）の前に座り、広いが古い部屋の中を見渡した。物品は、仕事用らしい大きな文机と傍らに並ぶ本棚に密集していた。削りたての鉛筆が並ぶトレイ、ノートパソコンと小ぶりのデスクライト、書名らしきものが書き込まれた卓上カレンダー。本棚にはベーシックな辞書の他に、何巻にも分かれた分厚い百科事典や外国語のもの、社会学の用語集、人類学の便覧、美術全集、植物図鑑、世界地図などおびただしい本が分野ごとに配列されている。

そこ以外には物の少ない部屋だった。押入れと、砂壁に寄せて置かれたプラスチックの衣装ケース一つで事足りるようだ。はみだしているものは鴨居にかかった黒いナイロンパーカーくらいだった。テレビもオーディオ機器もチェストもない。

台所で湯を沸かしているらしい佐原さんに声をかけた。

「お気遣い、いいのに。プレゼントのことも」

「あんな金のかかった宴に手ぶらでいけるか」

卓袱台の脇にこじんまりしたダンボール箱が置かれていた。

「この箱？　開けていい？」

佐原さんがうんと言うので蓋を開けた。緩衝材でくるまれたそれは、ぎょっとするほど青い釉薬（ゆうやく）が掛けられた、重厚かつ前衛的なやきものオブジェだった。丸みを帯びているが完全な球体ではなく、中は空洞のようだが出入り口はなく、いちめん鱗に覆われているが頭も尾もない。何が何だかわからないが手のひらに載せることはできる。お茶碗くらいがよかったが、それにしてもどこかで見たことのあるような作風だ。

首を伸ばして礼を言うと、湯呑み二つを持って戻ってきた佐原さんが

「何やってんのお前」と叫んだ。

「ふざけんな、どう見たって贈り物はこっちだろうが」

彼が威嚇中の猫みたいな剣幕で指す、卓袱台のもう一方の傍らには、たしかに若草色のリボンのかけられた包みがあった。私は言葉もなく手のひらの青いやきものを見つめた。佐原さんが黒装束で出てきた屋敷とこれとが、頭の中でぶつかった。あの旧家の敷地内には小さな美術館がある。このやきものは、美術館が収集している、地元出身の陶芸家の作品にちがいなかった。

「この間のあれは、盗みに入った帰りだったの？」

敷くように低い声で私は尋ねた。おなかの表面がこわばっていた。佐原さんはおどろおどろしい表情のまま湯呑みを差し出した。

「返しに行って失敗した帰りだったんだよ」

卓袱台は午後遅くの陽射しを受けて光っている。下の階からテレビの音が筒抜けだった。

「盗んだのは、いつ」

「十五のとき」

「私の命を救ってくれたあと？」

「いや。その前」

「どうして？」

佐原さんが卓袱台の向かいに腰を下ろす。胡坐(あぐら)をかいて私をつくづく見つめた。

「どうしてだと？」

そういえば彼に質問をすることなど今までほとんどなかった。「ぶっきらぼうで不器用な正義の味方」というイメージを壊すわけにいかなかったからだ。自分自身のために。

「教えたくなければ教えてくれなくていいんだからさ、そんな凄(すご)まないでよ」私は言った。

「教えるさ。俺はな、お前のわがままだけは聞く腹積もりだよ。教え、かつ凄む」

私は首をかしげて出がらしの番茶を啜(すす)った。味はとても遠いところにあった。

「当時クラスで金に困ってるやつがいて、あんまり毎日自分の窮状をべらべらと言いふらしてやがるからどうしても黙らせたくなった」佐原さんはスウェットの袖の毛玉を平たい指先で摘みとりながら言った。「あの頃の石崎の美術館なんてお前、湯呑み片手に盗れるくらい警備が手薄だったよ」

その陶芸家の作品は数百万の値打ちがあると私も聞いたことがある。

「せっかく盗んだのに受け取ってもらえなかったのは、その人の良心の呵責？　それとも一高校生に盗品を売りさばく闇ルートのつてなんてないから？」

「そんなん知らねえよ。そいつがわめきだしたからカッとなって結局殴って黙らせたしな。俺もあれだったんだ、いわゆる過渡期。わかったか」

過渡期とは、と私は思った。学級崩壊を次々引き起こしてきた問題児から、執拗な手つきで善行を積む青年への移り変わりを指すのだろうか？　わからなかったが、カッとなって黙らされる前に一旦うなずいた。手のひらの温度が移った青い焼き物をゆっくりと卓袱台に置く。私を急かすそぶりはちっとも見せなかったのに、佐原さんはすばやく取り上げて箱に納めた。それは天板から下ろされなかった。二人でしばらく箱のなかを透視していた。

「今さら返すんだね」私は言った。

「十五のときすぐに行ったけどだめだった、ぐるりと監視カメラだ。いやに気配のないおやじまで常駐させやがった。金ならうなるほどあるからな」

石崎は昔この一帯の大地主だったらしい。駅を挟んだ新興住宅街にある我家は何の影響下にもないが、何世代にも渡ってこの地に居住する子たちの口からは時々、緊張を表す「石崎に嫁ぐような」という慣用句がとびだす。

「亜季が自転車で通りがかった日は、たまたまあの屋敷の関係者が全員出払ってると知ったから、これ持って行ってみたんだ。でも客が来て

た」
「もう、このまま持ってたら？」
結婚資金か老後の蓄えの一つとして、と心の中で言い足した。数百万など石崎の家にとっては何ら痛手ではないはずだ。愛着ある作品を盗まれる痛みは、はかりかねた。私には美術を解する心がない。
「いや、これはもう俺だけのものじゃなくなってきた。持ってられない」
「え？」
「それに俺が盗ったものの中で、少しも変わってないのはたぶんこれだけだ。何ごともなかったように、元通りに戻せるのは」
さっきまで箱を睨んでいた佐原さんが、いつからか目の焦点を私にきつく合わせていた。意味をつかみかねた私はただ落ち着かない気持ちになった。
「そういえばあの表札、誰の字？」
「昔つきあってたやつの」
猫舌なのか佐原さんはやっと湯呑みに薄い唇をつけ、一口啜ってから言った。
「お前よくこんな出がらし飲みきったな。舌おかしいんじゃないの」
「おかしいよ。全部おかしい」
私は少しにっこりして言った。佐原さんは眉間に皺を寄せた。今年のプレゼントは、ふっくらと弾むような厚手の靴下と、ベルベッドみたいな光沢のタオルだった。オーガニックというタグがついているのは毎年恒例だ。どちらも瑞々しく澄みきった色だった。あまりにも優しい色だった。

どうしたの？　何かあったの？　体の具合でも悪いの？　ことあるごとに後ろの席から問いをすべり込ませていた史乃が、ふと同じ調子で尋ねてきた。
「どうしてあのとき私に順番を回さなかったの？」

「あのときって？」と聞き返す途中で私の声は消えた。着席しているのに、高いところから足をふみはずしたような感じがした。授業の合間の休憩時間だった。

「……あのとき私言ったよね？　私の都合だよ。史乃のためとか言うつもりはないし」

私はできるだけ何でもないことのように言った。そうか、この人の私に対する不自然さは、庇（かば）われたことを借りのように捉えているせいだったのか、と思いながら。史乃は言った。

「私、皆からひどい扱いを受ける心構えは出来てたんだよ、あのとき。ねえあれの始まりってめちゃくちゃ理不尽だったけど、確かに、抵抗しなかった私たちのせいで展開しちゃったことでしょ？　だから罰は引き受けるつもりだったの。でもあなたはあなたの都合だけで、全部自分にたぐり寄せた。私は、罰が回ってこない場合の心構えはしてなかった」

私は当惑した。史乃は青白い頬にかかる髪をかき上げて言った。

「なんだかあれからずっと気持ち悪いの。船酔いみたいに。どうしても終わらない」

「ちゃんと終わってるよ、半年も前に。彼だってもうこの土地にはいないし」

「でも亜季がいる」

「そうだねえ、いつもあなたの、目の前に」

ふざけるつもりはなく、口走ったらなぜか俳句みたいになっただけだったが、史乃は目の色を濃くした。

「私は亜季をどうしようもなく嫌いなの。逆恨みだと頭ではわかってるから我慢してきただけで。攻撃したい自分から亜季を守ってきたみたいなものよ。でもあなた自身すらあなたを守らないなら、私ももう我慢したくない」

史乃は公正だったと思う。さらけ出した後は、食い入るように見つめて私が正面から言い返してくるのを待っていた。でも私は彼女と同じテンションになれなかった。吐こうとしてももう胃の中が空っぽで何も出

せないときに似ていた。私がそう応じると、史乃は私の髪をつかんですごい速度で自分の方へ引き寄せた。耳もとで、とても短く、死ねと言った。

〈続く〉

牧田真有子（まきた・まゆこ）
80年生。デビュー作「椅子」（「文學界」07年12月号）から一貫して、どんなことでも起こりうる世界と偶然ここにいる自分に戸惑う人物が、自己の座標を測りなおす瞬間を描く。ちょっとボンヤリした主人公とエキセントリックなパートナーのコンビが魅力。

早稲田文学・オン・ウェブ
copyright by Makita Mayuko 2012
published by wasedabungaku 2012